

トポフィリアとまちの再デザイン

東京農業大学名誉教授・熊本県立大学名誉フェロー 蓑茂 壽太郎

本号は、社会の変化に対応して進められてきた制度改革、特に都市観光・交流や公園緑地関連の動きとその成果の特集と見受けた。スペインから 100 年越しのパンデミック・COVID-19 の災禍をはじめ内外に諸課題を抱える中、「持続可能な社会」の議論百出である。それも意識しつつ、この数年で私が経験した社会活動に触れながら、まちづくりのこれからについて私見を述べたいと思う。

トポフィリアがまちづくりの原点

トポフィリア topophilia とは「場所への愛着」のこと、トポはギリシャ語に語源を持ち「位置」や「場所」の意で、フィリアは「愛」を意味します。場所の広がりによっては地域愛や我が町意識と言えます。中国天津生まれでイギリスに学びメキシコや北米で活躍した人文主義地理学者のイーファー・トゥアン氏の著書《Yi-Fu Yuan (1974) : topophilia》で詳細に論じています。またナショナル・トラスト発祥のイギリスでは、市民信託のシビック・トラスト活動も盛んでプライド・オブ・プレイスの表現がよく使われています。自分が住む町に誇りを持つことが、上質なまちづくりの第一歩だとする考えは古今東西を問わず共通しているように思います。それなのに何を誇りにしたら良いかが掴めていないのが現実です。我が町を愛する糸口が見えない。あなたの町は遠来の友人を案内で

きる自慢の場所を持ち合わせていますか。町を全望できる高台の公園の人もいるでしょう。季節のお花見や紅葉の名所、あるいは美術館の人もいるかもしれません。その町固有の誇りとする資源を基本に考えるのが私の専門である造園、ランドスケープの分野です。借景などはその典型で、名山があるなら、それをランドマークにしたまちづくりを考える。名山でなくとも、市街地周辺に控えている小高い山や斜面緑地に「山当て」することもあります。私が、この話題にしたのは何故なのでしょう。これからの時代は、これまでと同様のまちづくりではないからです。

これからは「まちの再デザイン」

21 世紀の日本にあって、都市は再デザインの時代です。再開発が良く使われますが、私はあえて「再デザイン」を用います。再開発は一度開発され尽した区域が老朽化したことで、もう一度開発し直すというものです。それだと以前の町の区域が前提になります。これに対し、風景主導・ランドスケープイニシアティブ思考の私の場合は直前ではなく更にその前にまで想いを巡らすことになります。ですから「願いの達成」の意味があるデザインをあえて使うわけです。ここで取り上げる熊本市も戦後 70 年以上経ちますが、市街地に歴史的風致と認識できる資源が少なからずあります。私が関係してい

る熊本市中心市街地の「桜町・花畑周辺地区まちづくりマネジメント」の仕事では、基本構想でコンセプトを議論し《熊本城と庭続き まちの大広間》としました。築城 400 年を祝い市民の誇りである熊本城が、何とか見える状況から、はっきりと望める街並みに再デザインしました。ここでは名山ではなく名城への眺めを資源として、これとの視覚的なつながりを強固にするために「庭続き」を謳い、あわせて中心市街地の回遊性を引き出すウォークブルで居心地よい空間を「大広間」として設えるようにしました。視覚的と物理的の二つのつながりの確保です。これは既存の 2 カ所の都市公園に加え、従前は公的施設があった敷地や車道を歩行者空間の広場に転換してオープンスペースの体系で造り替えたものです。



熊本城と庭続き まちの大広間（熊本市提供）

復旧過程の熊本城を文化観光資源に

今でこそ歴史的で文化的資源として熊本観光を牽引する熊本城ですが、廃藩置県直後は必ずしも大事に扱われていませんでした。そうした状況下で天守をはじめ重要な櫓が、我が国最後の内戦・西南戦争（1877）で焼失します。市街地が被災した先の大战では城址は大きく被災しませんでした。しかし、明治と平成の二度の大地震で石垣を含め大きな被害を受けることになります。私は、平成 28（2016）年の熊本地震後に「熊本城復旧基本計画」に携わる機会を得

ました。熊本城は江戸城の 1 割減の広がりがある大きな城域で、国指定重要文化財の櫓の他に復元事業で再築された櫓等建造物の被害も大きく、その基盤となる石垣の修復等膨大な復旧工事を余儀なくされました。復旧に要する長期の年月から発想したのが公開展示型復旧です。復旧と公開を両立させる方法として期間限定の特別見学通路を設置しています。これは復旧過程を一つの観光資源として見せながら行う工事の手法です。激甚災害後の復旧事業を安全な場所から安心して学べるようにしたもので、すでに 100 万人以上に利用され、「工事中ですので立ち入りできません」ではなく、今までにはなかった都市の交流空間の役割を果たしています。



公開展示型復旧の特別見学通路からの景（熊本市提供）

都市の計画と歴史認識

—20 番目の政令市刊行の『都市史図解』—

持続可能な都市への対応は喫緊の課題です。私は地域認識とともに時代認識に留意することが重要だと考え、政策で使える実装化に力を入れています。平成 24（2012）年 4 月の政令市移行を機に同年 10 月開設の熊本市都市政策研究所で編纂した『熊本市都市史図解—都市形成と都市計画—』（2022）はその一つです。幕末から戦前までの都市形成史を 16 葉の図面で編纂した「都市形成史図集」（2014）、続いて 15

葉の図面での「戦後編」(2016)、それに都市の計画に係る時代変遷の要図 82 葉で編集した「都市計画史図集」(2021)の3分冊で構成しています。政令市移行前年の3月に九州新幹線鹿児島ルートは全線開業し、熊本は新しい時代を迎えました。私が深く関係するのは、平成24(2012)年の「桜町・花畑周辺地区まちづくりマネジメント検討委員会」発足からで、基本構想(2013)や基本計画(2014)、これに続く基本設計から完成(2022)まで継続して関与することになりました。

この四半世紀に亘る各種委員会活動など一連の社会活動で気になることがいくつかありました。その一つが、さまざまな計画立案での基礎調査に関連したことです。基礎調査は現状認識が目的ですが、そこに至った経緯についても十分に知る必要があります。地域の認識とともに歴史の認識、その町について色々と学び、考えを巡らすことで創造的な構想は生まれます。既存の小公園を活用しオープンスペース主導のまちの再デザインを構想したことが創造的成果の原点であると言えます。これへの共感を得るため、前記の《熊本城と庭続き、まちの大広間》をコンセプトに掲げたわけです。これを“なるほど”と思ってもらえることからすべてのアクションが始まりました。まちづくりに強い関心を示すステークホルダーの裾野が昨今の知識基盤型社会では、過去と比較すべくもなく広がっています。すべての市民への正確な情報提供が重要な時代になっています。我が町の成立に関する史料をだれもが容易に手にすることができる社会にしなければなりません。市民との協働や共生社会の実現には対話が欠かせません。そこから生まれる創造的な営みが共創のまちづくり

です。かつては公共の担い手である行政内部のインハウス・プランナーやデザイナーがいました。しかし、昨今の行政組織を眺めて、計画立案や設計行為のほとんどが外部委託となり、その人財が育つ環境ではないことに強い危機感を覚えています。

結びに



—都市公園制度制定 150 周年と文化財公園—

紙幅も尽きました。最後に一言、文化財庭園という言葉は聞きますが文化財公園は耳にしません。戦後につくられた厳島神社背後の紅葉谷川庭園砂防や長崎の西海橋が文化財登録されたわけですから、都市公園制度 150 年の今、文化財公園があっても不思議ではありません。明治6(1873)年の太政官布達第16号から数えて150年ですが、開園から1世紀を経過ないしは同等の歴史を持つ都市公園が、東京の日比谷公園(1903)、名古屋の鶴舞公園(1909)、大阪だと中之島公園(1891)、札幌では大通公園や中島公園(1910)、福岡も大濠公園(1929)と指折り数えることができます。都市公園を核とした周辺地区一帯のイノベーションが大変重要な再デザインの時代になりました。当該公園の真正性を損なうことなく公園の外部経済を正しく評価したパーク・イニシアティブのまちづくりを期待するものです。その時も原点となるのがトポフィリアだと思います。「つくる公園行政」から「つかう公園行政」へと軸足が移動したと眼に映るパーク・マネジメントの実践を日々見守りたいと思います。

(みのも としたろう)